

《神経心理学 Neuropsychology》についての覚書

浜 中 淑 彦*

現代神経心理学が、ようやく明確になりつつあった方法論的自覚のもとに確立される上で決定的契機となったのは、1963年に国際的であると同時に学際的規模で発刊された最初の専門誌“Neuropsychologia” (Pergamon Press, Oxford) であろう。これは、すでに発刊に先立って1951年以後 (1957~61を除き)、ヨーロッパの各地 (第1回はオーストリアの Mondsee) で、H. Hoff (Wien), K. Conrad (Hamburg), H. Hécaen (Paris), O. L. Zangwill (Oxford) らの提唱によって開催されるようになっていた《神経心理学国際シンポジウム International Neuropsychological Symposium》という workshop が母体となり、これにドイツから Cl. Faust, アメリカから A. L. Benton, D. Denny-Brown, B. Milner, H.-L. Tenber, K. H. Pribram らが参加して刊行された (イタリックは編集委員)。その創刊号の Editorial によると、「《神経心理学》なる用語のもとにわれわれが理解するのは、神経学者、精神医学者、心理学者、神経生理学者にとって共通の関心の対象となる神経学の特定の領域である。この関心の主たる焦点は……大脳皮質であり、われわれに特に関心のあるトピックスとしては、言語、知覚、行為の障害が含まれる」と神経心理学の領域が規定されているが、学際的性格の指摘を別とすれば、この概念規定そのものは、神経心理学の前身、母体ともいえるべき大脳病理学 Gehirnpathologie のそれと、さして大きく距るものではない、と思われる。

その後の神経心理学の研究領域の拡充が、いかに目覚ましいものであったかは、表1を御覧いただくまでもなく、読者の記憶になお新しい事柄に属するであろう。あえて二、三の蛇足をつけ加えることをお許しいただくならば、同じ年にはアメリカで“Academy of Aphasia”, 10年後には国際神経心理学会 (1973年), 1976~1978年にかけてドイツ語圏、フランス語圏そしてわが国でも専門的学術研究会が発足するに到っており、専門誌や叢書も“Cortex” (Milano, 1964) をはじめ現在ではすでに十指にあまる数にのぼっている。また神経心理学の概念も、例えば故 H. Hécaen (1912—1983) の晩年の著書 (M. Albert と共著, 1978) にみるごとく、「人間神経心理学とは、人間の行動の基盤にある神経性メカニズム neural mechanisms の研究である」と一段広く規定されるに至っており、人間神経心理学と動物神経心理学、臨床神経心理学と実験神経心理学、成人神経心理学と発達神経心理学といった分野が区別されているのが現状である。

しかしながら、《神経心理学》という科学そのものは決して新しいものではなく、また20世紀後半に突如として登場したわけでもないことは言うまでもない。神経心理学の“prehistory”については、すでに少なからぬ著作 (例えば大橋, 1960; 浜中, 1980/83の文献参照) があり、筆者もたびたび論じる機会があったので繰り返すことを控え、ここでは、実は遅くとも19

Apropos of “neuropsychology”

*京都大学医学部精神神経科, Toshihiko Hamanaka : Department of Psychiatry & Neurology, Faculty of Medicine, Kyoto University

表1 Development of Contemporary Neuropsychology

Conference	Journals etc
1951 I. Internat. Neuropsychol. Symp.	
1963 Academy of Aphasia (A)	"Neuropsychologia"
1964	"Cortex" (Milano)
1967	"J. Commun. Dis."
1973 I. Ann. Meet. Internat. Neuropsychol. Society	
1974	"Brain & Language"
1975 (Neuro-Behavioral Science)	
1976 Arbeitsgem. f. Aphasie-forschung u. -behandlung (G)	"Neurolinguistics"
Soc. de Neuropsychologie de langue française (F)	"Studies in Neuro-linguistics"
1977 Japan. Soc. Aphasiology (J)	"Patholinguistica" (D)
1978 I. Internat. Conf. on Hemispheric Laterality in Psychopathology (London)	"Psycholinguistics"
Japan. Neuropsychol. Soc. (J)	"Higher Brain Function Research" (J)
1979	"J. Clin. Neuropsychology"
1982	"Brain & Cognition"
1984	"Cognitive Neuropsychology"
1985	"J. Clin. Exper. Neuropsychology"
	"Japanese J. Neuropsychology" (J)

世紀中葉には——つまり近代神経心理学の出発点となった Broca による症例 Leborgne の剖検報告 (1861) に10年先立って——すでに医学文献に登場していた《神経心理学》なる用語について、若干述べてみたい。それによって、ある意味では同時に、神経心理学の "prehistory" の、従来あまり知られていない一側面に触れることができるかもしれないからでもある。

さて Oxford English Dictionary の Supplement Vol. 2 (1976) を参照すると英語圏では、Thomas Laycock (1812—1876: 図1) が J. A. Unzer (1727—1799) の生理学書の英訳 "The principles of physiology" (1851: 図2) を刊行し、その序文において "neuro-psychological" (p. ii) と "neuro-psychologist" (p. vi) なる語を用いたとの記載がある。Laycock とは言うまでもなく神経心理学においては J. H. Jackson (1835—1911) の師として知られている人物で、若き Jackson が York 医学校に在学中に彼の講義を聴いている (浜中, 1982) が、同じ York の British Association で「大脳の反射または自働作用 reflex or automatic action of the brain」(1844) の学説を発表し、これによって当時の大きなトピックスであ

ったヒステリーなどの症状を説明しようとした。これは、フランスやドイツにおける同時代の代表的精神神経学者 J. Baillarger の《自働症 automatisme》(1845/65) や W. Grisesinger の《心的反射作用 psychische Reflexaktionen》(1843/67) の学説とある種の共通項を有するもの (浜中, 1978 & 1982) として重要であるが、彼は後に Edinburgh 大学の臨床医学 practice of physic の教授となって精神医学をも講じ、主著《心と脳》(Mind and brain, or the correlations of consciousness and organization, with their applications to philosophy, physiology, mental pathology, and the practice of medicine, 1855——最近復刻版が出た) を著した。

Laycock が Unzer の《生理学原理》(Erste Gründe einer Physiologie der eigentlichen thierischen Natur thierischer Körper, 1771) の英訳を志すようになった背後の事情としては、彼が London 大学、Paris で学んだあと、1839年にドイツの Göttingen 大学に遊学して学位を取得し、上記の英訳序文でも言及されている「友人 Marx 教授」らと学問上の交流があったことが挙げられようが、直接にはこの序

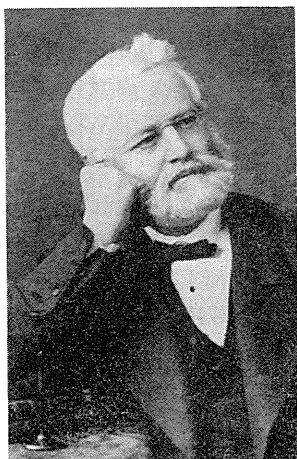
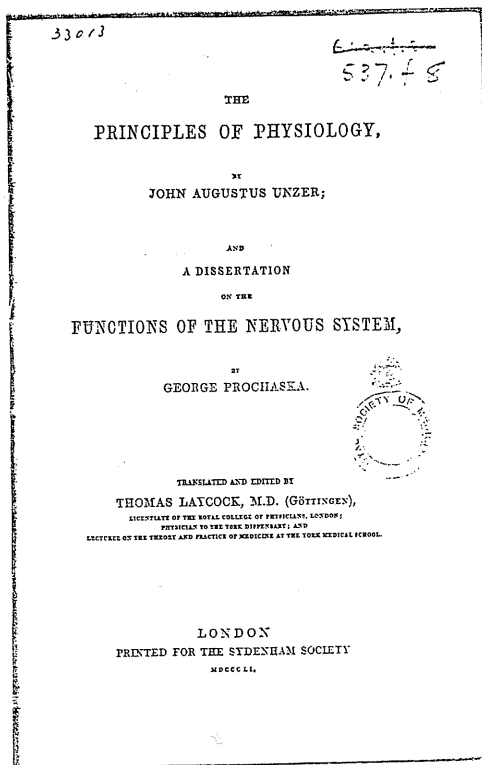


図1 Th. Laycock

図2 Th. Laycockによる J. A. Unzer
の英訳書の扉頁

文の歴史的展望において書き記しているごとく、彼自身が高く評価する Th. Willis (1621—1675) にはじまる近世の心身論の系譜上に Unzer の学説が位置づけられるという見解に関連しており、この訳書に彼が Wien の G. Prochaska (1749—1820) の神経機能論 “De functionibus systematis nervosi (1784)” (On the functions of the nervous system) の英訳をもあわせ収録したのも同じ理由による。

さて Laycock の序文で《神経心理学》の用語が登場する箇所を、彼の論旨を要約しつつ抄訳してみると、まず “neuropsychological” なる語は Unzer の経歴を紹介した冒頭の一節に登場する。

「この年〔1750年〕の末頃、彼〔Unzer〕は Halle を去って Hamburgh に居を定め、そこでは直ちに、《Hamburgh Magazine》(第6巻参照) に関与して、これに神経=形而上学的 neuro-metaphysical 性格の論文を種々寄稿した。……1759年に彼は Addison の《Spectator》誌をモデルとして医学週刊誌《医師 Der Arzt》を創刊した……彼がこの雑誌に掲載した数々の神経=心理学的試論 neuro-psychological essays は、本書〔《生理学原理》〕においてしばしば言及されている。……」

Laycock が《神経心理学》について語った時、いかなる問題を念頭においていたかは、Unzer の学説の起源を論じた以下の記述を読

めば一段と明確になるであろう。

「……Hoffmann も Stahl も共に長期間、〔Unzer が学んだ〕 Halle 大学の教授であった。……しかしながら彼は Juncker の門下として、自他共に許す Stahl の徒であったので、生的作用の形而上学 metaphysics of vital actions には特別の注意を払った……。当時の生理学、殊に神経系の生理学はその純粋に仮説的性格を急速に脱却し、一科学としての地位を獲得しつつあった。精神哲学 mental philosophy ははるか以前より、動物の運動にさまざまな種類があることを認識しており、誰もが少なくとも三種の運動を区別するに到っていた。即ち第一に、意志のみに依存する運動、第二に意識されてはいるが、惹起する原因としての意志に依存しない運動、第三に全く意識されることがなく、また意志によって惹起されることも抑制されることもない運動。第一類の作用は容易に心に帰属せし得るであろうが、第二、第三類の作用は、理性、意志、そして意識にすら依存

しないとは言え、動物の欲求に精確かつ知的な仕方では第一と同じである。このような適応行為の起源を説明し、その理性と意志に対する関係を規定することこそ、Plato 以来の数々の偉大な知性を抱え悩ました問題であり、満足すべき解答が世の人に与えられたことは未だ一度もない。……

Aristoteles の哲学は長年、各大学や学校において唯一通用するものであったが、解剖学と生理学の復興と共に、**生理学的形而上学** *physiological metaphysics* のさまざまな体系の輪郭が明らかとなり、解剖学、生理学、自然哲学が心理学と直接関連づけられるようになった。わが国の Willis はこの新しい医学の部門の主導者であった。……彼は二種類の心、即ち身体的または感性的 *corporeal or sensitive* な心（アニマ *anima*——動物の心）と理性的または知性的 *rational or intellectual* な心（アニムス *animus*）を区別し、後者に大脳を、前者には小脳を割り当て、そのさまざまな疾病、能力、作用を、特に《動物の心について *De anima brutorum*》の二つの論稿において論じた。第一論稿は生理学であり、多くの点で Unzer の著作に類同し、その原型をなすものである。第二論稿は病理学であり、脳と神経系の疾病を取扱っている。……

しかしながら Willis の学説は、人間に二つの心が存在するという点に関して孤立していたわけではない、殊に Gassendus と英国の学殖ある聖職者 Dr. Hammond（いずれも Willis と同時代人）を Willis は引用している。しかしまた自然科学を精神哲学に直接適用したのも Willis 唯一人というわけではない。彼が Oxford で追求していたと同じ研究方向を、Leyden では Sylvius が孜孜として追い求めていた。しかし Willis がその理論形成において Paracelsus の学説に影響されたのに対し、Sylvius は Descartes に従った。だが英国ではあまり知られていないとは言え、Sylvius と Willis と同時代に生きた今一人の神経=心理学者 *neuro-psychologist* がいて、彼らと同じまたは類似の学説を Jena で説いて輝かしい成

功をおさめていた——これこそ Hoffmann と Stahl の師たる G. W. Wedel である、——そして Willis にはじまる直線上に Unzer の見解を跡づけ得るのは、この Wedel を介してのことなのである。

Hoffmann と Stahl は生涯を通じて奇妙にも並行した経歴を辿った。……この二人の偉大な人物の神経=形而上学的 *neuro-metaphysical* 理説のうちに、Willis の見解の影響の跡は辿れるかもしれぬが、Stahl の精神の純粹に形而上学的方向への偏倚はやがて明白となった。何故なら彼は一切の組織学的、解剖学的、生化学的研究が医学においては無益にも劣るとして斥けたからである。……」

つまり Laycock の言う“*neuro-psychology*”とは、身体、殊に神経系についての自然科学又は「自然哲学」（生理学、解剖学、生化学、病理学など）を——単に「形而上学」とか「精神哲学」とも呼ばれる——心理学に適用して、——意識されない「身体的心」をも含めて——心身相関の問題を追求する科学であり、「神経=形而上学」、「生理学的形而上学」といった別称も与えられているが、古代ギリシャ以来存在したこのような視点が近代科学としての体裁を備えるようになったのは Willis や Sylvius, Wedel らの17世紀以降のことであると述べ、18世紀では Hoffmann, Stahl ついで——ここでは訳出しなかった箇所——J. G. Krüger (Halle), A. Haller (Göttingen), A. Monro (Edinburgh), そして Unzer や Prochaska の貢献が挙げられている。これだけでは Laycock が F. J. Gall (1758—1828) の脳器官学 (1810/19) や、Gall と Broca の接点に立つ J.-B. Bouillaud (1796—1881) の貢献 (1825) など、近代神経心理学の直接的先駆となった研究を、どのように評価していたかは、直ちに明らかではないとは言え、広い意味では「行動の基盤にある神経性メカニズムの研究」(Hécaen et al., 1978) と規定される神経心理学から、Laycock の考想はそれ程かけ離れたものではなかったと理解してさじつかえないであろう。事実、彼の「大脳反射作用」学説は、近代神経心理学の創設者の一人で

表2 Historical Development of "Neuropsychology"

Since Antiquity

1851	T. Laycock : "neuropsychological, neuro-psychologist"
1890	S. E. Henschen : "Pathologie des Gehirns"
1893	R. Dunglison : "neuropsychology"
1897	C. v. Monakow : "Gehirnpathologie"
1908	A. Pick : "Gehirnpathologie u. -Psychologie"
1934	I. Conference of Psycho-Neurological Sciences (Kharhov/USSR : L. S. Vigotsky)
1949	D. O. Hebb : "Organization of behavior : a neuropsychological theory"
1951	I. International Neuropsychological Symposium (Mondsee/Austria)
1952	K. S. Lashley : "Neuropsychology"
1959	F. Grewel : "Research in neuropsychology"
1960	E. A. Beach et al. : "Neuropsychology of Lashley"
1963	International Journal "Neuropsychologia"
1965	H. Ohashi : "Clinical neuropsychology"

ある Jackson の思想を生み出した土壌の一要因となったのである。

最後に Laycock 以後の《神経心理学》はいかなる運命を辿ったかを簡略に素描しておこう(表2)。OED は《神経心理学》の19世紀における用例として、わずかに R. Dunglison (1798—1869) の医学辞典 Dictionary of Medical Science (21版 : 1893) にみられる「心理学を含む神経学 neurology including psychology」を挙げているのみであり、その後は20世紀に入って D. O. Hebb の著書《行動の組織化 (Organization of behavior : a neuropsychological theory)》(1949) の副題まで引用が途絶えており、「神経心理学は Lashley の専門である」(Sci. Amer, 1955), 「彼は科学史, とりわけ神経心理学の歴史の連続した流れの中に適合する」(Boring, 1960), 「Lashley の著作以来, 神経心理学は生理学的心理学の一大部門となった」(R. L. Isaacson, 1964) といわれるが, 《量作用 mass action》(1929) の全体論者 K. Lashley (1890—1958) が明言的に "neuropsychology" について語ったのは1952年のようである——もっとも彼の類似の考想は, 「神経学的データと行動データの両者に定量的方法を適用した最初の試み」(1929), 「行動における基本的神経性メカニズム」(1930), 《神経学と心理学の融合》(1941), 《神経学と心理学の

相互に関連した発展》(1941), 《生理学的心理学》といった発言に遡るものではあるが (Beach et al., 1960 の著作表, Orbach, 1982 など参照)。

"neuropsychology" なる用語が1960年代に入るまでそれほど一般化しなかった理由の一つは, 明らかに19世紀末の古典論以後, 《(大) 脳病理学 (Ge-) Hirnpathologie》という名称が広く用いられようになったことに求められるのであろう。S. E. Henschen (1890) や C. v. Monakow (1897) の著書がその1例であろうが, 《脳病理学》は19世紀中葉まではかならずしもそのような限定された意味で用いられていたわけではない点に注意が必要であらう——例えば, 《大脳病理学概論》(1844) の S. Pinel や, 《Cerebralpathologie, Gehirnpathologie または Gehirn-Pathologie》(1867) について語った W. Griesinger は精神疾患の脳器質論に立つ見解を抱いていたが, 用語法自体としては, J. G. F. Baillarger の《神経系の解剖学, 生理学, 病理学研究》(1847) その他多くの語と同じく, 特別な意味を附与されてはいない。Th. Willis にも既に《大脳及び神経系統の病理学 Pathologiae cerebri et nervosi generis specimen》(1667) なる著書があり, その他この種の用例はおそらく枚挙に暇がないであろう。——ここでは《神経心理学》の《神経学 neurologie》(1667) が Willis に由来するこ

と、又《心理学》が従来主張 (Volkman, 1875/76, R. Eucken, 1879) されていたごとくルネサンスの神学者=人文学者 P. Melanchthon (1540) ではなく、ユーゴスロヴィアの人文学者 Marko Marulic (1450—1524) の《Psychiologia de ratione animae》(ca. 1520) や Freiburg 出の J. Th. Freige (Freigius) の著書《Ciceronianus》(1575) に既に見出されることが指摘 (Krstic, 1964; Lapointe, 1970; Starobinski, 1980) されており、神学的文脈を離れて《身体学 somatologia》との対比で用いられるにいたったのは Marburg の O. Casmann: 《Psychologia anthropologica》(1594) 以後のこととされ、17世紀にはこれが一般化して Willis も“psycheology”について語っている (Hunter et al., 1963) ことを指摘するにとどめよう。ただし学としての神経学や心理学はすでに古代以来存在していたことは言うまでもない。

なお《神経心理学》や《大脳病理学》のほぼ同義語としては、A. Pick の《大脳心理学 Gehirnpsychologie》(1908) や、L. S. Vigotsky が主催した学会の名称にみられる《心理=神経科学 psycho-neurological sciences》(1934) などもあり、大橋 (1960) は《神経=心理=病理学 neuro-psycho-pathologie》(フランス)、《大脳精神病理学 Gehirnpsychopathologie》(ドイツ) にも言及しているが、ここではこれ以上立入らない。

文 献

- 1) Baillarger, J. -G.-F.: Recherches sur l'anatomie, la physiologie et la pathologie du système nerveux. Paris, 1847.
- 2) Beach, F. A., Hebb, D. O., Morgan, C. T., Nissen, H. W. (ed): The neuropsychology of Lashley. Selected papers of K. S. Lashley. McGraw-Hill Book Co., N. Y., 1960.
- 3) Boring, E. G.: Lashley and cortical integration. in Beach et al. 1960.
- 4) Dunglison, R.: Dictionary of medical science. 21. ed., 1893.
- 5) Editorial: Neuropsychologia, 1; 1—6, 1963.
- 5 a) Grewel, F.: Research in neuropsychology. Asemiotic disorders and localization. Recent Neurological Research, (ed. by A. Biemond et al.) Elsevier, Amsterdam, 1959.
- 6) Griesinger, W.: Pathologie und Therapie der psychischen Krankheiten. 2. Aufl. 1867. Bonset, Amsterdam, 1964.
- 7) Hebb, D. O.: Organization of behavior: a neuropsychological theory. Wiley, N. Y., 1949.
- 8) Hécaen, H., Albert, M. L.: Human neuropsychology. Wiley, N. Y., 1978.
- 9) Henschen, S. E.: Die Pathologie des Gehirns. Bd. I. Nordiska Bokhandeln, Stockholm, 1890.
- 10) Hunter, R., Macalpine, I.: Three hundred years of psychiatry. Oxford Univ. Press, London, 1963.
- 11) Isaacson, R. L. (ed.): Basic readings in neuropsychology. 1964.
- 12) Lapointe, F. H.: Who originated the term “psychology”? J. Hist. Behav. Sci., 8; 328—335, 1970.
- 13) Lashley, K. S.: Neuropsychology. in Survey of neurobiology, Natl. Res. Council, Wash., (237); 18—23, 1952.
- 14) Laycock, Th.: Introduction to “The principle of physiology, by John Augustus Unzer; and a dissertation on the functions of the nervous system, by Goerge Prochaska,” (transl. and ed. by Th. Laycock), Sydenham Society, London 1851.
- 15) Monakow., C. v.: Die Gehirnpathologie. Hölder, Wien, 1897.
- 16) Orbach, J. (ed.): Neuropsychology after Lashley. L. Erlbaum Assoc., London, 1982.
- 17) Pick, A.: Studien zur Hirnpathologie und -Psychologie. Karger, Berlin, 1908.
- 18) Pinel, S.: Traité de pathologie cérébrale. Paris, 1844.
- 19) Starobinski, J.: Panorama succinct des sciences psychologiques, entre 1575 et 1625. Gesnerus, 37; 3—16, 1980.
- 20) 浜中淑彦: 失語の神経心理学史。失語症の基礎と臨床 (相沢豊三他編) 金剛出版, 東京, 1980.
- 21) 浜中淑彦: 神経心理学史の里程標, 1—18. 脳と神経, 34; 298 etc, 1982 & 35; 100 etc, 1983.
- 22) 浜中淑彦: 心とからだ。精神の科学 (飯田真他編), 第1巻, 岩波, 東京, 1983.
- 23) 浜中淑彦: 意識の障害。現代精神医学体系 (内村祐之他編), 3/A, 中山, 東京, 1978.
- 24) 大橋博司: 失語・失行・失認。医学書院, 東京, 1960.